

寄贈図書リスト

- ① 新天文学ライブラリー第8巻 ダークマター，川崎雅裕，A5判，272ページ，3,000円＋税，日本評論社
- ② 星の文化史 世界13地域における星の知識・伝

承・信仰，後藤明，A5判，254ページ，4,500円＋税，丸善出版

- ③ 見たこともない宇宙，キャロライン・ハーパー著，中野太郎訳，B5変形判，224ページ，3,500円＋税，柏書房

月報だより

月報だよりの原稿は毎月20日に締切り，翌月に発行の「天文月報」に掲載いたします。ご投稿いただいた記事は，翌月初旬に一度校正をお願いいたします。

記事の投稿は，e-mailで toukou@geppou.asj.or.jp 宛にお送りください。折り返し，受領の連絡をいたします。

賞の推薦

2025年度の島津賞・島津奨励賞の推薦募集 (学会推薦)

1. 島津賞候補者の推薦

わが国の科学技術振興のため，科学技術，主として科学計測に係る領域で，基礎的研究および応用・実用化研究において，著しい成果をあげた功労者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会等から推薦のあった候補者を，選考委員会が選考し，島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。

毎年度1件，賞状，賞牌，副賞500万円を贈呈します。

2. 島津奨励賞候補者の推薦

わが国の科学技術振興のため，科学技術，主として科学計測に係る領域で，基礎的研究および応用・実用化研究において独創的成果をあげ，かつその研究の発展が期待される45歳以下（4月1日時点）の若手研究者を表彰します。日本天文学会を含む島津賞・島津奨励賞推薦依頼学会および当財団関係者等から推薦のあった候補者を，選考委員会が選考し，島津科学技術振興財団理事会の審議を経て決定します。

毎年度3件以下，賞状，トロフィ，副賞100万円を贈呈します。

■募集締切

いずれの推薦も2025年7月10日（木）までに推薦書ファイル一式をメール添付にて日本天文学会事務長宛 jimucho@asj.or.jp に送付してください。

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地
公益財団法人 島津科学技術振興財団
事務局 TEL: (075)823-3240 FAX: (075)823-3241
URL: <https://www.shimadzu.co.jp/ssf>
E-mail: admin@ssf2012.onmicrosoft.com

第42回（2025年度）井上学術賞推薦要項

学会推薦による応募であるため，本会にて提出書類を審査のうえ，推薦いたします。

対象：自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績をあげた50歳未満（2025年9月20日現在）の研究者
助成金額および推薦数：賞状および金メダル，副賞200万円。

学会からの推薦件数：2件以内。

推薦要項：推薦要項の詳細および推薦書の書式は下記サイトをご覧ください。

<http://www.inoue-zaidan.or.jp/f-01.html>

締切：

2025年8月28日（木）（学会締切）

提出先：推薦書および主要文献（5編以内）のファイル一式をメール添付またはダウンロード情報を jimucho@asj.or.jp へ送付してください。

問い合わせ先：

賞に関する問い合わせは，井上科学振興財団（<http://www.inoue-zaidan.or.jp>）

学会推薦関係は学会事務所にお問い合わせください。

研究助成

公益財団法人住友財団
2025 年度 2 件の研究助成

基礎科学研究助成

助成の趣旨：重要でありながら研究資金が不十分とされている基礎科学研究，とりわけ新しい発想が期待される若手研究者による萌芽的な研究に対する助成を行うものです。

助成対象研究：理学（数学，物理学，化学，生物学）の各分野およびこれらの複合分野ならびに工学の基礎分野における萌芽的研究。

応募資格：2025年4月1日時点で45歳以下の若手研究者。産前・産後休暇，育児休業等の取得により研究期間の中断がある場合は年齢要件を考慮しますので，応募前に事務局にお問い合わせ下さい。

①国籍に関係なく，日本の大学等の研究機関に所属し，申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても，日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は応募可能です。なお，海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

*申請者の所属が営利企業等（兼務を含む）の場合には応募不可です。

*申請者が研究計画の推進に責任を持ち，助成金の管理及び助成期間満了後の報告を確実にこなすことを条件とします。

*申請者は，本年度当財団の研究助成に複数又は重複して応募はできません。なお，他の申請者の共同研究者として名前が記されることは問題ありません。

*2024年度基礎科学研究助成に採択された研究者の，同一テーマでの継続研究の応募も可とします（採択された研究の経過状況を含め「継続研究希望の理由」を申請書に付記。ただし，この取扱いは1回限りとしします）。なお，この場合も上記の年齢要件を満たさないときは応募できません。

助成金：総額2億円（1件当たり最大500万円）

環境研究助成

助成の趣旨：現在，人類が直面している大きな問題の一つに環境問題があります。地球温暖化，オゾン層破壊，酸性雨，生物種の減少，食料と人口，砂漠化，公害等様々な問題があり，また，生物多様性の保全，カーボンニュートラル実現に向けた再生資源・エネルギーの利用や持続可能な開発目標

（SDGs）の達成など課題も山積しております。

この助成は，これらの問題・課題の解決のためには多面的アプローチによる分析と様々な対応策の構築が必要と考え，そのためのいろいろな観点（人文科学・社会科学・自然科学）からの研究に対する支援を行うものです。

助成対象研究：

- ・一般研究：環境に関する研究（テーマ，分野は問いません。）
- ・課題研究：2025年度募集課題「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」

応募資格：研究者個人または研究グループ

①国籍に関係なく，日本の大学等の研究機関に所属し，申請に関する所属機関長の承諾がとれるのであれば応募可能です。

②上記①以外であっても，日本国籍を持つ者または日本に永住を許可されている外国人は応募可能です。なお，海外の大学等の研究機関に所属している者は所属機関長の承諾を得ることが必要です。

ただし，申請者の所属が営利企業等（兼務を含む）の場合には応募不可です。

助成金：総額1億円

一般研究 7,000万円 1件当たり最大 500万円

課題研究 3,000万円 1件当たり最大1,000万円

助成件数のめやす

一般研究 40件程度

課題研究 3件程度

共通事項

募集期間：

2025年4月15日(火)～6月30日(月) 日本標準時17:00

応募方法：財団ホームページ（本項最下部URL）から応募ページにアクセスし，手順に従って申請書類を作成して，システムにアップロードすることで申請を行って下さい。

連絡先：〒105-0012 東京都港区芝大門1-12-16

住友芝大門ビル2号館

公益財団法人 住友財団

TEL：03-5473-0161 FAX：03-5473-8471

E-mail：foundation@sumitomo.or.jp

URL：http://www.sumitomo.or.jp/

2025 年度島津科学技術振興財団
研究開発助成の募集

「主として科学計測に係る科学技術領域全般」と，

毎年度当財団が定める科学技術領域の「新分野」における独創的研究を対象とし、申請時点で国内の研究機関に所属する45歳以下（本年4月1日時点）の新進気鋭の研究者（国籍不問）に助成します。

助成金額は総額2300万円（23件以下）で、以下の分野ごとに募集します。

○「主として科学計測に係る科学技術領域全般」

助成金総額：2,000万円（1件につき100万円）を予定

○「新分野」

助成金総額：300万円（1件につき100万円）を予定

当年度の対象分野は、「先進情報技術の研究分野、または先進情報技術やデータサイエンスを用いて科学的課題解決を目指す研究分野」です。

■応募方法

必要書類一式を当財団ホームページよりダウンロードして提出してください。

島津科学技術振興財団 研究開発助成公募情報：

<https://www.shimadzu.co.jp/ssf/grants/apply.html>

■募集締切・提出先

2025年7月31日（木）17:00までに、島津科学技術振興財団指定のサイトへ提出してください。

詳細は「募集要項」（<https://www.shimadzu.co.jp/ssf/doc/apply/srg.pdf>）を参照してください。

■島津科学技術振興財団 問い合わせ先

〒604-8445 京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地
公益財団法人 島津科学技術振興財団
事務局 TEL: (075)823-3240 FAX: (075)823-3241
URL: <https://www.shimadzu.co.jp/SSF>
E-mail: ssf@zaidan.shimadzu.co.jp

会 務 案 内

日本天文学会 2025 年春季年会報告

2025年春季年会は、3月17日（月）から20日（木）までの4日間、水戸市民会館（茨城県水戸市、ホスト・後援：茨城大学）にて開催された。遠隔地から参加していただけるように、現地およびオンライン（ベストエフォート）のハイブリッド開催であった。講演は現地で行っていただくことを原則としたが、子育てや介護など特別の理由がある場合はオンライン講演も受け付けた。年会参加者数は、会員986名、非会員63名の計1,049名（うち現地参加者は811名）であっ

た。講演件数は、口頭講演（a）が508件、ポスター講演（b, c）が105件（うちポストデッドラインペーパー1件）の計613件であった。天文教育フォーラム、特別セッション（天文学白書）、および受賞記念講演も開催された。企画セッションは募集しなかった。開催地である茨城大学および参加者の皆様のご理解とご協力により、大きなトラブルなく、有効な年会とすることができた。参加者・関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたい。座長は次頁の方々に務めていただいた。会場・時間帯別にお名前を示し、感謝の意を表する（敬称略）。

〈記者会見〉

日本天文学会2025年春季年会記者会見は、2025年3月14日（金）13:00から、オンライン及び茨城大学水戸駅南サテライトでのハイブリッド形式にて開催された。冒頭、百瀬副会長による挨拶、日本天文学会の組織・活動概要の説明と各賞受賞者の紹介、及び、本春季年会の紹介が行われた。それに続き、百瀬副会長の司会・進行により、天文教育普及賞の受賞理由と日本天文遺産の認定についての報告、及び学術発表2件が行われた。当日は報道機関から7名、それ以外の関係者2名の参加があった。天文遺産の認定を中心に、多くの全国紙・地方紙（オンライン版含む）やウェブメディアにおける報道、研究機関のホームページでの紹介が幅広く行われたことを確認している。

第7回（2024年度）天文教育普及賞（3件）

「一般社団法人星つむぎの村」

「加藤恒彦（かとうつねひこ）・立教大学特任教授」

「村松修（むらまつおさむ）・コスモプラネタリウム渋谷/元五島プラネタリウム解説員」

渡部潤一（天文教育普及賞選考委員会委員長）

第7回（2024年度）日本天文遺産（3件）

「臨時緯度観測所本館（木村榮記念館）（岩手県奥州市）」

「三鷹200 MHz太陽電波望遠鏡（長野県南佐久郡南牧村）」

「花山天文台（本館、別館、子午線館）（京都府京都市）」

松尾厚（日本天文遺産選考委員会委員長）

	3月17日		3月18日		3月19日		3月20日
	10:30-12:40	14:00-16:10	9:30-11:40	13:00-15:10	9:30-11:40	13:00-15:10	9:30-11:40
A	銀河団 三石郁之 (名古屋大学)	銀河団/宇宙論 石山智明 (千葉大学)	宇宙論 正木彰伍 (中京大学)	太陽 今田晋亮 (東京大学)	太陽 上野悟 (京都大学)	太陽 石川遼太郎 (核融合科学 研究所)	太陽 松本琢磨 (名古屋大学)
B	星間現象 川中宣太 (東京都立大学)	星間現象 田中周太 (青山学院大学)	星間現象 山本宏昭 (名古屋大学)	星間現象 岩田悠平 (国立天文台)	観測機器 新沼浩太郎 (山口大学)	観測機器 村瀬建 (岐阜大学)	観測機器 谷口暁星 (北見工業大学)
C	恒星・恒星進化 上塚貴史 (東京大学)	恒星・恒星進化 松永典之 (東京大学)	恒星・恒星進化 西村信哉 (東京大学)	恒星・恒星進化 小形美沙 (早稲田大学)	活動銀河核 川室太希 (大阪大学)	活動銀河核 秦和弘 (名古屋市立大学)	活動銀河核 小出眞路 (熊本大学)
D	教育・広報・他 伊藤信成 (三重大学)	教育・広報・他 林隆之 (麻布中学校・ 高等学校)	観測機器 江副祐一郎 (東京都立大学)	観測機器 北本俊二 (立教大学)	観測機器 玉川徹 (理化学研究所)	観測機器 中嶋大 (関東学院大学)	
E	銀河 小麥真也 (工学院大学)	星形成 大橋聡史 (国立天文台)	星形成 廣田朋也 (国立天文台)	星形成 下西隆 (新潟大学)	星形成/原始惑星 系円盤 安井千香子 (国立天文台)	原始惑星系円盤 田崎亮 (東京大学)	原始惑星系円盤 奥住聡 (東京科学大学)
F	惑星系 青山雄彦 (中山大學)	惑星系 小林浩 (名古屋大学)	観測機器 本田充彦 (岡山理科大学)	観測機器 樺引洸佑 (国立天文台)	観測機器 平原靖大 (名古屋大学)	観測機器 白崎裕治 (国立天文台)	観測機器 松浦周二 (関西学院大学)
G	銀河形成・進化 馬渡健 (早稲田大学)	銀河形成・進化 札本佳伸 (千葉大学)	銀河形成・進化 兒玉忠恭 (東北大学)	銀河形成・進化 長島雅裕 (文教大学)	銀河形成・進化 泉拓磨 (国立天文台)	銀河形成・進化 小久保充 (国立天文台)	銀河形成・進化 市川幸平 (早稲田大学)
H	コンパクト天体 柴田晋平 (山形大学)	コンパクト天体 土肥明 (理化学研究所)	コンパクト天体 山口弘悦 (宇宙航空研究 開発機構)	コンパクト天体 樫山和己 (東北大学)	コンパクト天体 水本岬希 (福岡教育大学)	コンパクト天体 鈴木寛大 (宇宙航空研究 開発機構)	

学術発表その1
深宇宙から届く謎の天体現象、高速電波パーストの新
事実発見—そのほぼ全てが「繰り返す」爆発だった！
山崎翔太郎（國立中興大學）、後藤友嗣（國立清華大
學）、橋本哲也（國立中興大學）

学術発表その2
天文学・宇宙物理学用語の知見獲得に対するポップカ
ルチャーの影響～「○○ばかり見てないで勉強しなさい！」は正しいか？～
山崎大（茨城大学）、日下部展彦（アストロバイオロ
ジーセンター/国立天文台）、川越至桜（東京大学）
（百瀬宗武）

〈特別セッション〉
「みんなで天文学の未来を語ろう！第2回」
世話人：天文学白書委員会第1期委員
赤堀卓也（国立天文台）、石川遼子（国立天文台）、
岡本桜子（国立天文台）、鷹野重之（九州産業大
学）、河原 創（JAXA/宇宙科学研究所）、高橋慶
太郎（熊本大学・委員長）、田中雅臣（東北大学）、

富田賢吾（東北大学）、野田浩司（千葉大学）、野田
博文（東北大学）、米徳大輔（金沢大学）

年会最終日の3月20日(木) 14:00-16:00に天文学白
書に関する特別セッションがハイブリッド形式で開催
されました。本セッションは2024年秋季年会での
キックオフに続く第2回で、天文学の社会的側面にス
ポットを当てました。参加者の人数は現地が約50名、
オンラインが約30名と多くの方に参加していただき
ました。

本セッションではまず委員長の高橋から天文学白書
委員会の趣旨が改めて説明されました。この事業は日
本天文学会員が波長横断・分野横断で天文学全体につ
いて楽しく語り合う場を作って天文学コミュニティを
盛り上げていくこと、そしてコミュニティの夢を白書
としてまとめることを主な目的としています。白書の
章立てとしてはサイエンス5章（「太陽と恒星」「星と
生命」「高エネルギー現象」「銀河と銀河団」「宇宙
論」）と天文学を支える諸要素に関する5章（「天文学
を支える技術と実験」「ICTで飛躍する天文学」「天文
学と歴史」「持続可能なコミュニティ」「天文学と社

会)」が予定されています。詳しくは天文月報2025年2月号の記事をご参照ください。

最初の基調講演はTMT国際天文台の嘉数悠子氏による「地域社会に根ざした天文学を目指して—マウナケアの教訓」でした。ハワイでのTMT建設をめぐる議論は、科学と先住民文化の共存の重要性を改めて私たちに認識させてくれました。ここ数年、TMTは地域社会と連携し、尊重・包摂・共同管理の精神に基づいて教育や環境保全に取り組んでいます。講演ではこれらの取り組みが具体的に紹介され、その教訓をもとに他のプロジェクトへの有益な知見が提供されました。

次の基調講演は九州産業大学の鴈野重之氏による「天文学と社会の接点」です。鴈野氏は第1回の集会には一般の聴衆として参加していましたが、積極的に意見を述べていただき委員に熱意が伝わったため、その後に声をかけて委員会に加わっていただくことになりました。鴈野氏の講演は教育・普及・キャリアパス・市民天文学・メディアなど天文学と社会の様々な接点を広く紹介するもので、天文学者が活躍できる場が広がっていることを感じさせてくれるものでした。

当初は2つの基調講演の後に35分間のパネルディスカッションを行う予定でしたが、聴衆の皆さんの質問やコメントが非常に多く盛り上がったため、委員を中心としたパネリストの皆さんにはほんの一言ずつ述べていただくだけとなりました。嬉しい誤算です。最後に、白書の執筆者を募集する旨を告知し、どのような白書になるかのイメージを説明する予定でしたが、これも時間が足りなかったためほんの少し案内するだけとなりました。白書の執筆者募集に関しては何らかの形で改めて告知する予定です。2025年の秋季年会でもまた特別セッションを開催したいと考えておりますのでご期待ください。

〈天文教育フォーラム〉

会期初日の17時から18時30分まで、日本天文教育普及研究会との共催にて天文教育フォーラムが開催された。今回は水戸市民会館の中ホール（天文学会G会場）とオンラインとのハイブリッド開催であり、対面とオンライン合わせて約100名の方にご参加いただいた。

今回のフォーラムのテーマは、「天文教育におけるSTEM/STEAMとこれから」であった。STEM/STEAM教育という言葉が聞かれるようになって久しい。STEMはScience（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Mathematics（数学）の頭文字を取り、これらの教育を横断的・総合的に進めていくもの

で、これにArt(s)（芸術、リベラルアーツ）を加えたSTEAM教育として各国に広がりつつある。本フォーラムでも2016年秋季年会にて「STEM/STEAM教育と天文学」というテーマで取り上げたことがあったが、DX（デジタル・トランスフォーメーション）化や、生成AI技術の急速な発展など、社会情勢の変化を受けて、いま再び注目を集めるようになっていく。天文学は、もとより科学や技術だけでなく、芸術や哲学なども扱うことができる総合的な分野であるが、よりその姿を明確にするため、今回の天文教育フォーラムでは招待講演者よりSTEAM教育の現状、また天文学に関わるSTEAMの実践例などを共有し、STEAM教育の課題や今後の方向などの議論を行う場として、今回のテーマが設定された。

今回は話題提供として、東京大学の川越至桜氏と、東京学芸大学の大谷忠氏、株式会社steAm代表取締役を務められている中島さち子氏を招待講師としてお招きし、STEAMの背景からそれぞれの活動についてご紹介いただいた。2016年の時点ではメジャーではなかった生成AIやビッグデータなどの技術も広まり、教育現場を含め、様々なSTEAM教育の活動の実践があることが共有された。その後、参加者全体を含めた意見交換の場を設け、天文学におけるSTEAMはどういうことが考えられるかについての議論を行った。招待講師の方からの丁寧な回答もあり、「実社会の問題解決」にとどまらない、「課題発見能力」を培う上での天文学におけるSTEAM教育の可能性について議論された。天文学の研究をしていると、宇宙ステーションなど地球のごく近傍の宇宙空間のことは「自分のやっている天文学とは違う」と思うことも多い。しかし、天文学をやっているからこそ、遠くの宇宙だけではなく、地球を含めた近くの宇宙やそこにいる生命を含めた、広義の天文学を捉え直すと、天文学におけるSTEAM教育の可能性が広がるのではないだろうか。

教育関係者を含め研究者においても、様々な活動がされている方も多いことと思う。すでにSTEAM的な活動がされている方も、そう思ってやっていない方も、本フォーラムの知見を得て、さらに発展的な活動に進展してもらえるのであれば、望外の喜びである。

（日下部展彦）

〈受賞記念講演〉

年会2日目の3月18日16:00からの会員全体集会にて、2024年度の林忠四郎賞、研究奨励賞、欧文研究報告論文賞、天体発見賞、天体発見功労賞、天文功労賞、天文教育普及賞の授賞式が行われた。また、翌

3月19日16:00からは、林忠四郎賞と研究奨励賞の受賞記念講演が行なわれた。受賞記念講演における講演者（敬称略）および講演タイトルは以下の通りである。

林忠四郎賞受賞記念講演

井岡邦仁（京都大学）「高エネルギー突発天体の理論的研究」

研究奨励賞受賞記念講演

Nugroho Stevanus（アストロバイオロジーセンター）
「Decoding Exoplanet Atmospheres using High-resolution Spectroscopy: New Chemical Species, Temperature Inversions and the Path Forward」

藤林翔（東北大学）「連星中性子星合体における質量放出と重元素合成」

札本佳伸（千葉大学）「遠方銀河の観測的研究と海外への旅」

井岡氏の講演では、長年にわたる高エネルギー突発天体への先駆的な理論研究の取り組みが、その時々緑のあった方々とのエピソードと共に紹介されるとともに、いかにユニークで訴求力のある研究を展開していくかについて、若手研究者や学生に向けたメッセージも紹介された。研究奨励賞の3氏による講演も熱意に溢れており、参加者はおおいに刺激を受けたことだと思う。なお、欧文研究報告論文賞はHirano et al. 2020, PASJ, 72, 93とKitaki et al. 2021, PASJ, 73, 450の2編に授与された。受賞記念講演は2025年度の秋季年会で実施される予定である。

〈保育室〉

水戸市民会館4階の和室にて保育室を開設した。本年会では4家族5名が一時保育を利用した。保育室の準備にあたり、茨城大学のスタッフの方々にはさまざまな協力をお願いしたことを感謝する。

〈ジュニアセッション〉

第27回ジュニアセッションを、春季年会最終日の3月20日（木・祝）に、現地とオンラインでのハイブリッド形式で開催した。発表数は63件、そのうち現地会場での発表が41件であった。参加者数は、現地会場が発表者生徒168名、指導者38名に加え、保護者や教育関係者などの一般の参加者、運営関係者合わせて305名であった。オンライン参加者は、発表関係者が33接続、その他が39接続であった。これに加えて、年会参加の研究者が数十名参加しており、全体

として約430名がセッションに参加したことになる。3月の比較的遅い時期かつ祝日の開催だったこと、年会中の開催だったことから、発表数、参加者数ともに昨年を超える盛況となった。

当日は井田会長の挨拶に始まり、午前、午後それぞれ約2時間の口頭発表セッションを行った。座長は、午前中が濤崎智佳（上越教育大学）、西健一郎（鹿児島県立国分高等学校）、午後が鳥羽儀樹（国立天文台）、布施亮平（駿台学園高等学校）の各氏にお願いした。例年通り口頭発表の希望が多く、1件あたりの発表時間は3分だったが、各発表者は研究の要点をうまくまとめて発表し、座長の的確な進行も相まって午前・午後ともほぼスケジュール通りに進められた。昼の時間帯と午後の口頭セッション終了後に、現地会場ではポスターセッションを行い、年会参加の研究者も含めて熱気あふれる活発な議論が行われた。ジュニアセッションでは、口頭発表の有無にかかわらずすべての発表がポスターセッションに参加することが基本で、現地参加できなかった発表はホームページ上にPDFを掲示し、コメントを収集して発表者に送付することとしている。また、今年も、タイの高校生から6件の発表があった。残念ながらオンラインによる発表だったため、対面での深い議論ができなかったが、レベルの高い研究は、参加者にも印象的だったと思う。

近年では、大学や研究機関が主催あるいは学校と連携するなどして研究を指導するケースが増え、またインターネットの普及により最先端の観測データを誰でも利用できる環境が整っているため、ジュニアセッションで発表される研究の専門度、レベルが格段に上昇している。それは一方で、研究が迷走する危険性もはらんでいる。これらの意欲的な研究が適確な方向に進むよう、ジュニアセッション実行委員会はもちろんのこと、天文学会に所属する研究者のアドバイスがますます必要になってきていると考えている。一方で、部活による数十年に渡る継続的な観測に基づく研究など、天文学的に重要な資料の提示もあり、ぜひ今後も発展させていってほしいと願っている。

今回のジュニアセッションは、水戸市民ホールの大ホールを割り当てていただいた。会場に入るなり、その広さに感嘆の声を上げる生徒たちが何人もいて、発表者の意欲もさらに高まったことと思う。逆にホール設備との関係から、オンライン参加者にとっては音声品質が悪く、発表を十分に伝えられなかったことは申し訳なく思う。昨年来会場との調整を行ってくださった開催地の関係者の皆様、年会実行委員会、予稿や発表資料の確認、前日の準備から当日の運営を手分けし

て行った世話人の皆様には改めて感謝したい。

ジュニアセッション実行委員会では、今後も運営方法の安定化と改善をはかり、より充実したセッションが行えるように活動を進めて行きたいと考えている。ジュニアセッションでは、例年参加者同士またプロの研究者との深い議論を行うことで、生徒たちのみならず指導する先生方も強い刺激を受けて、天文学研究への理解と研究力向上につながってきた。引き続き天文学会会員の皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

最後になったが、本ジュニアセッションは、日本天文学会が主催し、日本天文教育普及研究会が共催、日本学術会議が後援した。参加者およびご協力いただいた関係各位に御礼申し上げる。

(山村一誠)

〈公開講演会〉

日本天文学会第74回公開講演会は、2025年3月16日(日) 13:30から16:30まで、茨城大学の後援を得て、水戸市民会館ユードムホール(中ホール)で開催された。120名の聴衆が参加し、「宇宙の始まりから生命が集う星へ～最新天文学と宇宙天気予報の挑戦～」を統一タイトルに、以下の3講演が行われた。

- (1)「アルマ望遠鏡とジェームズ・ウェッブ宇宙望遠鏡が明らかにした宇宙の始まりの銀河たち」講師：橋本拓也氏(筑波大学・助教)
- (2)「第二の地球を探る～将来観測から解き明かすその誕生と環境～」講師：逢澤正嵩氏(茨城大学・助教)
- (3)「気象予報士が考える宇宙天気キャスターが活躍する未来」講師：齊田季実治氏(株式会社ヒンメル・コンサルティング代表取締役、気象予報士)

これに引き続いて行われた講演者と聴衆の議論セッションでは、講演内容に加えAIデータサイエンスまで話が広がり、活発な質疑応答が交わされた。参加者にはこの分野が学術的な進展だけでなく、身の回りの日常生活にも寄与していることを伝えられた。司会は百瀬宗武副会長(茨城大学)が務めた。

(百瀬宗武)

〈懇親会およびビアスタンド〉

年会3日目の3月19日(水) 18:00より、講演会場と同じ建物内の1階やぐら広場において、2019年秋季年会以来5年半ぶりの懇親会が行われた。事前申込者391名(一般191名、学生200名)、年会開催期間中の参加申込者37名(一般21名、学生16名)のほか、来賓3名および年会開催に尽力いただいた学生など23名を合わせて計454名の参加があった。この参加

者数は、参加者数の集計結果が残されている2007年以降では、2011年秋季年会(鹿児島大学)次ぐ歴代2位であった。事前申込はオンライン決済サービス「イベントペイ」を用いて事前決済を行う事により年会開催期間中の受付業務を極力簡略化するとともに、キャンセルのリスクを軽減させた。一方、年会開催期間中の参加申込みは懇親会開始直前まで現金払いにて受け付けた。懇親会開始30分前から、懇親会会場入り口にて水戸の梅大使2名、水戸黄門様御一行、地元のキャラクター「みとちゃん」による出迎えがあり、参加者は記念写真を撮るなど大いに盛り上がっていた。懇親会は茨城大学の野澤恵開催地理事の進行で18:00より始まり、高橋靖水戸市長、太田寛行茨城大学学長、岡田誠茨城大学理学部長による挨拶をいただいた。その後百瀬宗武天文学会副会長、梅大使、水戸黄門様御一行、みとちゃんも加わって、水戸の酒蔵である明利酒類の「副将軍」の酒樽の鏡開きを行い、百瀬氏による挨拶および乾杯のご発声で飲食がスタートした。懇親会中頃に、梅大使2名の挨拶、水戸黄門様御一行(〔一社〕水戸葵社中)による演劇が行われた。終盤には、次回開催地である山口大学の新沼浩太郎開催地理事より挨拶と次期年会への参加の呼びかけがあった。その後、予定を30分超過した20:30に散会となった。企画制作・メニュー監修・和食提供を地元の鰻屋である「蒲焼割烹ぬりや」にお願いし、シェフ戸田康利氏、スーシェフ戸田明子氏が洋食提供を担当し、あんこう鍋、すみつかれ、けんちん汁などの郷土料理や、常陸牛ローストビーフ、うなぎの炊き込みご飯、チャーシュー、牛すじ煮込みなどの料理が提供された。アルコールは、カクテル提供を水戸市内のBar Areaに、クラフトビール提供を、水戸ブルーイング大工町醸造所(水戸市)、ビーチカルチャーブルーイング(茨城県大洗町)、イエローピアワークス(福島市)にお願いした。

また、おそらく初の試みとして、年会1,2,3日目の午後から夕方にかけて、元山町ブルワリー／ビアスタンド(水戸市)およびイエローピアワークス(福島市)の協力でクラフトビアスタンドの営業が、講演会場と同じ建物内の2階ホワイエにて行われた。連日100名程度がクラフトビールを片手に研究などの議論などを行い大盛況であった。

(米倉覚則)

(年会実行委員長：廿日出文洋)

入会・移籍・退会のお知らせ

2025年3月17日に開催された公益社団法人日本天

文学会理事会において、正式に入会・移籍が承認された方、退会が報告された方の人数をお知らせします。

入会 正会員：19名 準会員：3名
2025年度入会 正会員：2名 準会員4名
退会 正会員：5名
移籍 準→正：3名 正→準：12名

2026 年度日本天文学会「国内研修支援金」の公募

〈募集要項〉

応募資格：応募時点で日本天文学会会員であること（内規第3条）。

募集人数：若干名

研修期間：2026年4月から2027年3月までの12カ月のうち希望する期間。

※受入機関、指導教員（受入研究者）と相談の上で決めていただきます。

※研究終了後、2カ月以内に研究報告書を提出していただきます。

支給額：総額25万円以下（2026年4月支給予定）

申込み：応募申請書に必要事項を記入し、電子ファイルをEメールで送付してください。郵送の場合は、国立天文台内「日本天文学会事務長」宛てに紙面を送付してください。

送付先：日本天文学会事務長

住 所：〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1

国立天文台内

email: jimucho@asj.or.jp

応募締切：2025年8月29日（金）必着。

審 査：国内研修支援金選考委員会（内規第5条）で審査し、10月中旬までに通知いたします。

申請用紙：学会ホームページからダウンロードいただくか、日本天文学会事務所（jimucho@asj.or.jp）までご請求ください。

<https://www.asj.or.jp/jp/activities/expenses/kensyu/>
（申請書の書き方例もご参照ください）

成果の発表：研修期間終了後2ヶ月以内に「研修成果報告書」を提出していただきます（「天文月報」に掲載されます）。また、天文学会年会において研究報告（発表）を行うことを推奨します。

なお、国内研修支援金に関する内規は天文学会ホームページの「定款・細則・内規」に掲載されています。

<https://www.asj.or.jp/jp/about/articles/#naichi>

問い合わせ先：国内研修支援金選考委員会（委員長：

高妻真次郎）

kokunai-kenshu2023@asj.or.jp

編集委員会より

天文月報編集委員 退任の言葉

私は『天文月報』の編集委員を2期4年間、その中の後半2年間は編集長を務めさせていただきました。『天文月報』という歴史ある刊行物の編集長という大役を無事に何とか務めあげることができたのも、編集委員としての役割を見事に果たして頂けた他の編集委員の皆さん、月報編集事務としての豊富な経験をもとに様々な場面で適切な助言をもとに編集活動を支えてくださった越田さんと栗田さん、そして何よりいつも素晴らしい記事を投稿するなど、天文月報の活動を支えていただいている天文学会の会員の皆さんのお陰だと思っています。

これからは『天文月報』の1読者として、毎月の記事を楽しみにしたいと思っています。ありがとうございます。

（津村耕司）

2期4年にわたって務めた編集委員を退任します。編集委員の重要な仕事である原稿チェックでは、私に関係する研究分野だけでなく、様々な種類の熱意あふれる記事をじっくり読み込むことができ、私自身にとって非常に有意義な経験でした。始めはマニュアルを逐一確認しながらの作業でしたので、想像以上に大変な作業でしたが、徐々にペースを掴んで2期目には楽しく仕事ができるようになりました。4年間で特集記事をメインで担当することがなく、アクティブな編集委員とは言えなかったことは申し訳なく思っています。星・惑星形成分野で活躍する、特に若手の方々の記事収集が十分できたとは言えませんが、それでも少しでも該当分野の研究成果をわかりやすく伝える一助になれたのであれば嬉しい限りです。4年間本当にありがとうございました。

（岩崎一成）

2期4年にわたり編集委員を務めさせていただきました、この度退任することとなりました。100年以上の歴史を持つ天文月報の編集に関わる機会を得ることができたことを光栄に思います。特に印象深いのは、編集委員として最初に担当した高橋慶太郎さんによる小平桂一先生の12回連載のロングインタビューです。私が

現在働いているすばる望遠鏡の計画をリードされた小平先生の幼少期から現在まで、誰よりも先に原稿を読むことができる貴重な機会に恵まれ、毎回とても楽しく編集作業に取り組むことができました。また、自分の専門外の内容も含めて、幅広い天文学の話題について、また幅広い世代の著者の方々の個性がうかがえる文章に触れることができ、編集委員としてのみならず、一読者としても学ぶことの多い時間だったと思います。天文月報が今後もますます発展していくことを心より願っております。最後に、いつも丁寧に作業の面倒をみてくださった日本天文学会の越田さんと栗田さん、編集長をはじめ委員の皆様には深く感謝申し上げます。

(小野寺仁人)

天文月報編集委員を2期4年務めさせていただきました。天文月報は査読のない雑誌ですが、実情は、分野の異なる3名の編集委員が記事を確認し、適宜改善案を出し、これに著者が対応し、さらに仕上げの事務点検が入ります。この一連の編集作業には数カ月を要するのが一般的で、1つ1つの記事が大変な手間をかけ、丁寧に作り上げられていることを知りました。私自身は編集委員として目立った仕事はできませんでしたが、編集作業を通じ、天文学の普及に少しばかり貢献できたことを嬉しく思っています。実際には貢献というのもおこがましく、編集委員でなければ読まないかもしれない、自分の専門分野以外の記事をしっかりと読む良い勉強の機会を得たようなもので、編集委員の機会を頂いたことに感謝しています。今後は一読者として、天文月報を楽しませていただきます。ありがとうございました。

(勝田哲)

このたび、天文月報の編集委員としての4年間の任期を終えることとなりました。この期間に多くの記事・企画を担当し、特集にも一つ（「光赤外位置天文学」；2023年5月号～7月号）携わることができ、大変充実した任期であったように思います。

編集委員としての活動を通じて、これまで以上にじっくりと月報を読み込む機会を得、掲載される記事の内容の豊富さと奥深さに改めて深く感銘を受けました。特に、校閲の段階では、自分の研究テーマとは異なる分野の記事を扱うことも多く、少しでも分野が異なれば知らないことが多いことを痛感いたしました。同時に、他分野の研究者や非研究者の方々に、自分の研究の面白さをどのように伝えるかをじっくり考えるきっかけにもなりました。月1回の編集会議では、他

の編集委員の皆さまの高い意識に刺激を受け、自分もいち研究者として天文学の振興・普及に少しでも貢献したいという思いを新たにいたしました。また、会議での報告やSNS等で読者の方々からの感想を知る機会もあり、特に自分が担当した記事に良い反応があったときは大きな喜びを感じました。4年間の任期を経て、天文月報が日本の天文学界に果たしている役割の重要性に、遅まきながら気づかされた次第です。

編集・校閲作業は大変ではありましたが、もともと文章を読むことが好きなこともあり、楽しみのひとつでもありました。ですので、退任に際し、寂しさを感じる部分もありますが、今後は一読者として引き続き天文月報を楽しませていただければと思います。

最後に、他の編集委員の皆さま、月報係の越田さん、栗田さん、記事を寄せてくださった執筆者の皆さま、そして天文月報を愛読してくださっている皆さまに、心から感謝を申し上げるとともに、天文月報のますますの発展を心より願っております。

(川中宣太)

4年間にわたり、編集委員というこれまでにない貴重な経験をさせていただき、心より感謝申し上げます。着任当初は、自分に編集委員という大役が務まるのか不安でしたが、当時編集長の江草さんをはじめ、事務局の皆さま、そして他の編集委員の皆さまに支えられ、4年間走り続けることができました。

着任早々には機械学習の特集を担当させていただき、その際、天文学のさまざまな分野で多様な形で機械学習が活用されていることに改めて驚かされた記憶があります。また、日々の業務として行ってきた校閲や点検などを通して、これまで以上に入念に記事を読み込むようになり、自然と分野外の知識も広がっていききました。楽しみながら、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。偶然にも大学院時代の同期が多く編集委員を務めており、リラックスした雰囲気の中で活動に参加できたのも幸運でした。これまでお世話になったすべての方々に深く感謝申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

(西澤淳)

2期4年にわたって編集委員を務めさせていただきました。記事の担当や原稿チェックを通じて、天文学に携わる多くの方々と関わることができ、有意義な4年間でした。自分の専門外の分野や、天文普及に関するものなど様々なジャンルの記事を読者の皆様に届けることができ、大変光栄に思います。執筆者と読者の皆様、またお世話になった委員と月報係の皆様は心

から感謝致します。

今後も天文月報が天文学の発展・普及に貢献していくことを期待しています。

(仏坂健太)

訃報

会員の木村博氏は2025年4月2日に逝去されました。満87歳でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

天文月報118巻7月号 主な掲載予定記事

アストロバイオロジーセンター10周年特集(1): アストロバイオロジーセンターの10年【田村元秀】 アストロバイオロジーセンターにおける系外惑星系の高コントラスト撮像【葛原昌幸】 系外惑星における光合成【滝澤謙二】

EUREKA: 相互作用銀河の電波観測から探る銀河衝突がもたらす分子ガスの性質変化【金子紘之】

〈シリーズ〉天文学者たちの昭和: 日江井榮二郎氏ロングインタビュー [第4回] 乗鞍コロナ観測所(2)【高橋慶太郎】

編集委員: 津村耕司(委員長), 岩崎一成, 小野寺仁人, 勝田哲, 川中宣太, 西澤淳, 仏坂健太, 岡本文典,

日下部展彦, 小山翔子, 志達めぐみ, 鈴木大介, 烏海森, 信川久美子, 橋本拓也, 宮本祐介

令和7年5月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

印刷発行 印刷所 〒162-0801 新宿区山吹町332-6 株式会社 国際文献社

定価733円(本体667円) 発行所 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 公益社団法人 日本天文学会

Tel: 0422-31-1359(事務所)/0422-31-5488(月報) Fax: 0422-31-5487

振込口座: 郵便振替口座00160-1-13595 日本天文学会

三菱UFJ銀行 三鷹支店(普) 4434400 公益社団法人 日本天文学会

日本天文学会のウェブサイト <https://www.asj.or.jp/> 月報編集 e-mail: toukou@geppou.asj.or.jp

会費には天文月報購読料が含まれます。

©公益社団法人日本天文学会2025年(本誌掲載記事は無断転載を禁じます)